

服部英雄先生の御退官に寄せる

桜井, 松夫
元和田小学校校長

<https://doi.org/10.15017/1523916>

出版情報：歴史を歩く時代を歩く：服部英雄退職記念誌：とことん服部英雄，pp.285-286，2015-03-31．九州大学大学院比較社会文化研究院服部英雄研究室
バージョン：
権利関係：



服部英雄先生の御退官に寄せる

桜井 松夫

昭和四十九年（一九七四）四月、服部先生が東京大学文学部の大学院生でおられたとき、私は、はじめて服部先生にお目にかかり、それから今日までの四十一年間、ずっと色々なお世話をいただいてまいりました。私がこの年に、長野県教育委員会から内地留学を許可され、文学部国史研究室の石井進先生に師事することになり、昭和四十九年の一年間、服部先生や法政大学で教鞭をとられた中野栄夫先生・お茶の水女子大教授の安田次郎先生・昭和女子大教授の山本博也先生などの方々がおられる「日本の中世社会」をテーマにしたゼミにも参加させていただきました。なにしろ、小学校教員で、しかも世間知らずの信州の田舎者でしたから、私は戸惑う事ばかりでした。そんな中で、なにくれとなくやさしく親切に私の面倒を見て下さった方が、若いころの「服部英雄さん」でした。自宅の机に腰をかけたその向かい合いの書棚に『鎌倉遺文』を並べてありますが、その第一巻から六巻まで、ケースの上部に、鉛筆で「桜井」と書いてあります。私の分まで注文をとりまとめて下さり、この文字は、配布の際にメモされたのでしょうか。今はすっかり薄くなりましたが、この背の文字をみるたびに、「あゝ、こんな事までお世話いただいたんだ」と本を手にするたびに感謝の念がよみがえってまいります。

「日本の中世社会」の院のゼミでは、順番に研究発表がおこなわれ、服部さんは、昭和五十年（一九七五）の一月に「中世相良一族における領主支配の展開」と題した発表をされました。人吉盆地の相良氏と大隅・薩摩・芦北・八代との交流や年貢京進の道、人吉荘の収取体系と在地構造、正平廿三年の一族一揆、南九州国人一揆等にわたり、元久の地頭相良長頼の父頼景の時代から今川了俊の南北朝

期に及ぶ長い時代の綿密な調べを発表されて感服したことを記憶しております。それから三年ほどたった昭和五十二年でしたか、服部先生は、第七十四回史学会大会の日本史部会で、「戦国大名・相良氏治下の八代衆とは何か——勝俣氏の「郡中惣」説を批判する——」と題した発表もされました。

平成十九年（二〇〇七）に、先生は朝日新聞社から「朝日選書」として『峠の歴史学』を出版されました。峠を、流通・軍事・信仰の視点から捉えられた優れた業績で、たいへんおもしろい一編でした。その中の一編に、人吉盆地と現八代市との間の照岳・白岩山・国見山を結ぶ庵室道を、戦国期と西南戦争の両時代の軍事の道として取り上げておられます。今考えてみると、院生の中から服部先生と九州との見えない糸がつながっていたのかも知れません。

また、『峠の歴史』の中で、中山道の「和田峠」も取り上げておられます。江戸から碓氷峠を越え、さらに長野県の小縣郡ちいさなぐんから諏訪郡へ越す峠で、峠の頂上は標高一六〇〇m、和田宿から次の下諏訪宿迄の距離は五里半（二一・六km）あって、標高・宿間距離ともに五街道中の最高最長の難路でした。標高八一〇mの和田宿から人も馬もその荷物も、八百m持ち上げて、また持ち下げる苦労は筆舌に表す事も難しく、和田村の近世文書には、若い馬でさえ脚が吃る（ままやく）ようになってしまい、馬が短命であることを歎いた嘆願書が出されたのを残しています。

和田峠の北側が長野県小縣郡和田村で、私は、昭和六十〜六十二年の三年間、ここの和田小学校に赴任していましたが、服部先生はこのころ、文化庁におられ文化財調査官でおられて、よく和田村教育委員会に足を運ばれ、宿の保存・旧中

山道の保存整備・本陣母屋建物ほか旧宿屋建物の保存活用について、懇切なご指導をいただき、何かと面倒をみていただきました。そのおかげで、このころから和田村は宿の保存に目覚め、村人の誇れるものとして、いろいろなイベントを運営し、保存の工夫・近世交通に対する村人の学習を積み重ねるようになりました。和田の宿や村の人々にとつて、かけがえのない物心両面の財産を遺していただいたと思つています。そのころご来村のおり、峠の頂上近い東餅屋の一宿で、和田村教育委員会のすでに若くして故人となられた上原茂さんを交えて徳利を傾けた事を思い出します。

私は小学校勤めの忙しさを隠れ蓑に、浅学人に倍する不勉強者のため、服部先生のご著書もその一部分しか手にしていませんが、大著『景観に探る中世』の「みそさく」や「ようじゃく」の地名考証は、私の脳裏に重たい石で強烈にゴツンとやられたほどの衝撃を感じました。東信（東信濃）史学会の希望者で史跡めぐりをした際に、大宰府市の観世音寺や大宰府跡を訪れたとき、途次で「水城跡」を目にしました。先生が書かれた『歴史を読み解く―さまざまな史料と視角―』の本の「文永十一年の冬の嵐」で論及された『八幡愚童訓』の記事と服部先生のお顔を思い起こしながら、バスから眺めたものでした。

『峠の歴史学』の冒頭に「あるき、み、きく」の書出しで、次のように書いておられます。

「なぜ古道を歩くことによつて歴史の理解が深まるのか。歴史の追体験は不可能かもしれないが、疑似体験はできる。たとえば峠道を歩いて越える。すると、書物に書かれた歴史とはかなり異なる実感が得られるだろう。読むだけでなく歩くことによつて追体験がほぼ可能になると思う。（後略）」と。

先生の云われる、足であるき、目でみて、耳で聞いて学ぶ、服部英雄先生が展開されるご論調には、どのご本にも共通の重たい「かたまり」のようなものを感じます。それは、きっと服部先生の足と目と耳とで織りなした「ご学問の核」とでもいうべきもののように思います。

ご退官の後は、少しは余裕も生じるでしょうから、信州の山里にご来駕の折に、お話をお聞きする機会を設けて、信州のちいさがたびとにも先生のご学問の核に触れさせていただき、ご高懷を分けていただきたいものと念願しております。

（元和田小学校校長）